



靴に恋する人魚(人魚朵朵 / The Shoe Fairy)

2006(平成18)年10月9日鑑賞<テアトル梅田>

監督・脚本 = 李芸嬋 / 出演 = 徐若瑄 / 周群達 / 堂娜 / 朱約信 / 阮文萍 / 李康宜 / J.A.M. / 應蔚民 / 林子聰 / ナレーション = 劉德華 (IMX、マジックアワー配給 / 2005年台湾映画 / 95分)

…… 30歳を超えた徐若瑄が、『人魚姫』にヒントを得たちょっと恐い(?) 童話の主役として登場! おじさんの見どころはその美しい足だが、映画のテーマは女の物欲の恐さ(業)を切り口に、黒い羊と白い羊に暗示される「幸せとは……?」を観客に考えさせること……。不幸から幸せへ、幸せから不幸へ、そして教訓となるのは映画後半からの『マッチ売りの少女』をなぞったような急展開の物語だが、人生ってそんなに単純なもの……?


 徐若瑄に惹かれて観たが……?

この映画の主人公ドドを演ずる台湾生まれの徐若瑄は、1990年代に台湾でアイドルグループ「少女隊」の一人として歌手デビューしたかわいい女の子で、その顔と名前は今でもよく覚えている。そんな彼女は1975年生まれだから既に30歳を超えているが、女性監督の李芸嬋監督に、童話風のつくりとされているこの映画の主役にピッタリと判断されたほどだから、今でもそのかわいさは不変……?

それにしても、『靴に恋する人魚』というかわいいタイトルと裏腹に、美しい足とその足にふさわしい美しい靴をテーマとしたこの映画(童話)はかなり残酷……。そもそも、アンデルセン作の『人魚姫』という童話自体も、「王子に恋した人魚姫は、魔女から声と引き換えに足をもらう。しかし王子は他の娘と結婚することになり、人魚姫は海の泡となる」というものだから、本来残酷な物語……? したがって、徐若瑄に惹かれて観たものの、私のような心のやさしいおじさん(?)には、この映画は結構刺激が強い……?

これで歯医者がつとまるの……？

ドドが出会った王子さまは歯医者ダンカン・チョウのスマイリー（周群達）で、30回のデートの後2人は結婚することになるのだが、このプロセスは童話というよりむしろマンガの世界……？ そして、スマイリーがドドにゾッコンという状態での結婚だから、どちらかという力関係はドドの方が上で、スマイリーは何でもドドのわがままを聞いてやっている様子。こんな2人のままごとみたいな甘い甘い新婚生活は2人の勝手だからいいようなものの、こんなガキみたいな歯医者さんで、ホントに患者の歯の治療ができるの、と思わず心配になってしまったが……？

ドドも一皮剥けばイメルダ夫人……？

女の物欲のすごさは古今東西を通じた真理で、それが権力と結びつけば男以上に……。清朝末期の西太后もすごかったらしいが、今は失脚したフィリピンのマルコス大統領のイメルダ夫人の靴収集癖もすごかったらしく、有名なセリフは「三千足なんでもっていません。千六十足です」というもの。

イメルダ夫人は権力者だから、宝石でもドレスでも靴でも何でも集め放題だが、ドドは幸いお金に不自由しない歯医者ダンカン・チョウと結婚できたものの、所詮は主婦。それにもかかわらず、ドドは靴が大好きで靴屋の前を通るたび靴を買っているため、靴部屋まで備えた新居だったが、今や靴が溢れ出すことに……。そんな中、「靴を買わない努力をしてみたら？」というスマイリーのアドバイスは適切なもので、ドドもそれを受け入れ努力していたが、遂にある日……。かわいい主婦のドドだって所詮女だから、イメルダ夫人と同じ物欲の血が流れているのかも……？

この映画のテーマは？

ドドの少女時代は車椅子の生活だったから、その楽しみは童話を読んでもらうこと。したがって、ドドが『人魚姫』を読んだ時の心配は、「もし、私が足をもらったら、声をとられてしまうの？」ということだった。しかし、足の手術は大成功し、ドドは歩くことができるように……。

そんな手術の際、ドドが夢の中で魔女タン・ナ（堂娜）から聞いた言葉は、「きれいな足と、たくさんの美しい靴と王子さまがあなたのものになる。でも忘れないで。幸せとは黒

い羊と白い羊を手に入れることなの」というもの。この映画はそんなテーマを童話仕立てで描くものだが、さて黒い羊と白い羊の意味するものは……？

こんな残酷なストーリーあり……？

魔女の予言どおり、きれいな足と美しい靴と王子さまを手に入れたドドだったが、そんな彼女を襲った悲劇は、靴屋で見た赤い靴に魅せられたドドの不注意からマンホールの中に転落し、その結果せっかく手に入れた美しい足を失ってしまったこと。

ここから、この映画の雰囲気とドドの様子がガラリと変わり、何とも沈痛な雰囲気に……。それに追い打ちをかけたのが、車椅子に乗るドドを献身的に支えていたスマイリーの目がかすんできたこと。これでは細かい作業をしなければならない歯医者の仕事もできなくなり、休業状態に……。まさに、踏んだり蹴ったりとはこの夫婦のこと。こんな残酷なストーリーあり？ と思ってしまうが、さて2人はこんな残酷な運命を変えることができるのだろうか……？

「人生訓」は西洋も東洋も同じ……？

「黒い羊と白い羊」という魔女のアドバイス(?)は日本人にはわかりにくいだが、私の理解するところでは、結局同じことを意味する人生訓が「禍福は糾える縄の如し」ということ……。つまり「苦あれば楽あり、楽あれば苦あり」で、不幸がいつまでも続くわけではないということ。

この映画は台湾映画でありながら、グリム童話やアンデルセン童話そしてサン＝テグジュペリの『星の王子さま』やルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』などの童話が映画の中にいっぱい取り込まれている。そして前半の主役は『人魚姫』だが、後半のそれは『マッチ売りの少女』。今や不幸のどん底にある(と思っている)ドドの家を訪れ、車椅子に座るドドの前に立ったのは、「マッチはいかがですか？」と勧めるマッチ売りの少女だが、何と彼女の足は裸足。マッチを買い、1本のマッチを擦りその灯りを見るたびに幸せな思い出が甦ってきたドドが、そこでやっと気づいたことは……？ 物欲に染まらず、1本のマッチの灯りの大切さや幸せに気づくことができれば、きっと人間は誰でも幸せになることができるはず……。以降、スクリーン上にはそんな夢みtainな話が進行していくが、さてあなたはそれに十分納得できる……？

アンディ・ラウのFFC 第1弾だが……

香港生まれの劉德華^{アンディ・ラウ}はこれまで120本以上の映画に出演しているが、俳優業だけでなくプロデュース業にも進出し、自ら企画から配給まで幅広く手がけるフォーカス・フィルムズを設立している。そんな彼が、フォーカス・フィルムズで2005年に新たに立ちあげたプロジェクトがFFC（アジア新星流）で、これは新たな才能を持つ若手監督たちを支援し、いい映画づくりを目指そうというもの。その第1弾が^{ロビン・リー}李芸嫻監督によるこの『靴に恋する人魚』だが、この作品は2005年の第42回台湾金馬奨で最優秀美術賞を受賞したとのこと。しかし、私のこの映画に対する評価ははっきり言ってかなり下……。

台湾の映画市場の小ささにビックリ

パンフレットにある暉峻創三氏の「台湾映画の新たな潮流」には、昨年「台湾映画年間製作100本宣言」がぶち上げられ、世間をあっと言わせたと書かれている。これは裏を返せば、それまでの台湾映画の年間平均製作本数はせいぜい20本程度で、政府の保護なしには映画産業は壊滅寸前とまで囁かれていたらしい。この「100本宣言」の結果、昨年は目標には至らなかったものの、約40本が製作されたとのこと。インターネット資料によれば、2006年の韓国映画の製作本数が105本、2005年の日本映画の上映本数が356本であることに対比すれば、台湾の映画市場の小ささにビックリ……。

2006(平成18)年10月11日記